



西村 國彦(にしむら くにひこ)

昭和22年6月17日生

昭和47年 東京大学法学部卒業

昭和51年 東京弁護士会登録

現在、さくら共同法律事務所シニアパートナー、日本ゴルフ学会常務理事

東相模ゴルフクラブの破産・競売に際し、会員2000名以上を組織して会員のプレー権を保護。ゴルフ場据置期間延長問題と日東興業グループ和議申立ほかのゴルフ場の法的再建事件等、会員とゴルフ場を守るための諸活動に力を入れている。

真のゴルフプレーヤーの立場から、21世紀に向けたバブル経済崩壊後の新しいゴルフ場再生について様々な発言をしている。まじめな経営者と会員と金融機関の叡知に基づく協議によるゴルフ場再生を訴えつつ全国各地のゴルフ場再生に、NPOや中間法人などボランティア活動の導入も提言している。近時、ゴルフプレーそのものばかりでなく、世界のゴルフコースを研究中。ゴルフジャーナリストの肩書きも持つ。

●(主な著書)「ゴルフ場再生への提言」(平成11年・八潮出版社)／「賢いゴルフ場 賢いゴルファーのための法戦略」(平成15年・現代人文社)／「平成ゴルファーの事件簿」(平成15年・現代人文社)

●(連載中の雑誌記事) 1.月刊ゴルフ場セミナー(ゴルフダイジェスト社) 2.季刊ゴルフスタ(ゴルフ総合出版) 3.隔週刊アルパトロス・ビュー(小池書院)

ジュニアゴルファーの受け入れにあたって新しい発想を

1 問題のありか

トラブル予防やリスク回避という法的観点からはジュニアゴルファーの受け入れにあたって、ゴルフ場側は事前に十分に検討のうえ対策を立てておく必要があると言わざるをえません。では、そのようなトラブル予防などのため、ゴルフ場はジュニアの受け入れなどやめるべきなのでしょうか。もちろん、結論は否です。ちなみにこのような議論は、最近よく報道される医療事故や医療過誤を巡ってよくなされています。手術の失敗の場合、必ず担当医の責任が裁判で問われるとするなら、医師たちは防衛的になって、リスクのある難しい手術をやろうとしなくなるというわけです。その結果、医学の進歩は止まり、医師の技術や能力も伸びなくなりますがそれで本当に良いのでしょうか、ということです。誰も、医学の進歩や医師の技能を伸ばすことの価値を疑うことはないでしょう。

話をゴルフに戻しましょう。まず、ゴルフの底辺拡大にジュニアゴルファーが果たす役割を考えると、ジュニアゴルファーの受け入れを広げていく必要があることは周知のとおりです。

しかしそのようなニーズだけなら、スタート時間に余裕のある地区のコースなどを有効活用するなどが精一杯でしょう。しかもトラブル含みのジュニアゴルファー導入に積極的な意味は発見しにくいいため、ゴルフ場側は腰が引けるばかりです。

2 新しい発想をファースト・ティの意味の変化

しかし今こそ、ジュニアゴルファーの導入に関して、新しい発想が採用されなければいけません。海外、特に米国においても当初、「プレーのため継続的に安い費用でプレーできる機会を提供」し、ジュニアがゴルフゲームに触れやすくすることが中心だったようです。

しかしそのような発想だけでは、ゴルフ場もまた参加するジュニアや彼らを指導するスタッフも、前向きになるはずはありません。

今では、ジュニアをゴルフゲームに親しませる(ファースト・ティと呼ばれています)主要な目的は、「あらゆる背景を持つ若者に、ゴルフと人格教育を通じて自分の人生を豊かにするための中核となる価値基準を発見し、高める機会を提供すること」にあるとされています。ちなみにこの価値基準というのは、正直、誠実、スポーツマンシップ、尊敬、礼儀、判断力、自信、責任、忍耐の9つとされています。

要するに、「子供たちをゴルフ場の一番ティグラウンドに連れ出すことで、ゴルフに馴染ませながら非行防止にも一役買おう」(デューク石川)というプログラムです。このプログラムの受け皿として、全米各地では今もパー3コースが次々造られ、パブリックコースとともに子供たちに解放されているのです。日本の子供たちが野球やサッカーに馴染むのと同じ感覚でゴルフに親しめる環境が、そこにはあるのです。このプログラムは1997年11月、あの樋口・青木両プロが招き入れられた世界殿堂を運営するワールド・ゴルフ・ファウンデーションが創り出したものです。これは年間30ドル以下の費用負担で参加でき、貧富の差なく全ての若者(7~17才位)にゴルフの楽しさを伝え、ゴルフ界の底辺拡大に貢献しているのです。

3 ライフスキルの本当の意味

ファースト・ティ・プログラムは「ライフスキルに関わる教育」と言ってよいでしょう。しかし「スキル」という言葉から連想して、技術的なものと考えるのは大きな間違いです。むしろ、「ゴルフを通じて子供に文化的な素養を持たせる」というところに重点がありそうです。なぜでしょうか。確かにゴルフは自らを律する(自分で考え、自分で判断して課題を解決する)スポーツと言われ、唯一審判がないスポーツでもあります。さらに、技術に加え高い道徳や判断力が要求されるとも言われます。もちろん健康によいことは言うまでもありません。つまりゴルフは「年齢・性別・体力・運動能力はもちろん、社会的地位も関係なく、等しく楽しさや挑戦する喜びを味わうことができる」価値あるすばらしいゲームであり、それが世界中に広まっている理由なのでしょう(戸張捷)。

私自身も個人的には一生ゴルフを続けるし、「ゴルフで得たものはゴルフに返す」(アマチュアの鑑と称される全米トップアマであったチック・エバンスの思想)のが当然と考えています。

しかし、ゴルフをやらない人たちにまでそのような考えを押しつけるつもりも必要ありません。ゴルフの「プレーを通じて自分を確立する」こと自体に価値があると言えばいいことではないでしょうか。そしてゴルフにこのような価値がなければ、各種のリスクを犯してまで、ゴルフ関係者がジュニアゴルフ育成に取り組む意味はないと思います。

4 リスクを超えた価値を見つけよう

逆に言うと、ゴルフはそのような価値のあるものだからこそ、多少のリスクを犯してもファースト・ティを実現することは賞賛されてしかるべきだということです。すなわちゴルフ場は後ろ向きの責任回避ばかり考えてないで、前向きにファースト・ティに協力しようということです。こういう前向きの価値が認められるものなら、スタート時間確保に神経質な会員たちやゴルフは贅沢な遊びだと思込みがちなマスメディアも納得するでしょう。また万一、不幸にして発生した事故に対する司法関係者の判断も自ずと変わってくるはずはです。

参考文献

●ファースト・ティ・コーチ・プログラム(2004年ワールド・ゴルフ・ファウンデーション・インク) ●永井洋一 2004スポーツは「良い子」を育てるか NHK出版 生活人新書 ●デューク石川 ジュニア育成 海外との現状比較 ゴルフタイムス 2005年2月号 ●トーナメントナウ 社団法人日本ゴルフトーナメント振興協会